

工芸と美術の歴史を考察し自身の制作研究をおこなう

大阪芸術大学 教養課程 准教授 加藤隆明

制作レポートについて

自身は現代アートと呼ばれる領域で作品を発表している。しかし鑑賞者からの感想が素材の特異性に留まることが多く、その理由を、制作を通して確認しようと考えた。

現在の作品形態

現在使用している素材は、主に天蚕繭と真珠である。それ以外に作品化のため金粉銀粉などの金属粉や有刺鉄線などを使用している。主なる素材は生体鉱物といわれるものである。

制作方法は、カッターナイフで天蚕繭を縦に半分にわり、それをホッチキスと瞬間接着剤でつなぎ合わせ幅1m 長さ3m近くの物体にして壁に設置したレリーフ的作品である。天蚕繭の外側は、蚕から吐き出されたシルク糸の集積により手触り感のある表面になっている。内の凹面は幼体の変身するための場所のため、外表面のような手触り感はなくまるでロウを敷き詰めたようなツルツルの摩擦を感じない面をしている。蚕の変身は幼体の体が一度溶けて、再度脳の発生から器官や内臓へと生まれ変わる。内なる閉ざされた空間の特異なところである。その面には金や銀の鉱物とレジンを混ぜ塗りつけてその後硬化させる。

真珠の作品は有刺鉄線の棘部分に真珠に穴を当てはめる。この真珠はくず真珠としてあり本物の真珠であるが商品価値はない。有刺鉄線の機能を生体鉱物的物体の真珠で無害化していくような作品である。真珠は貝などの内に異物として入ってきたものを、内からの刺激を緩和するため曲面化した物体の表面に真珠層が覆う。有機的素材から発生する無機質物、それを再度外部に表出させる。

作品を鑑賞する

現代アートと呼ばれる領域は基本ヨーロッパの美術の歴史を根底に持ちその思想が作品を支えている。それは一般的に美術史といわれるものである。先史時代、エジプト、ギリシャ・ローマ、中世、ルネッサンスと続く年表を中学、高校等で教えられる。ヨーロッパの社会変革とともに美術の形態の変容が行われている。そして鑑賞者のまなざしも同時代の社会概念に共有される。

近代以降の美術運動は先鋭的であり、鑑賞者が同時代的思想に一時戸惑いもあるが、美術の日常化情報化により鑑賞者への理解浸透も早いと考える。特に造形芸術作品のイメージと素材の選択は密接にあり素材の物語が現在でも引き継がれている。そのような素材の物語は鑑賞者と共有していると考えている。

美術と工芸

美術年表を確認すると世界の美術の歴史（主にヨーロッパ）と並行して東洋・日本の移行状態が記されている。明治期あたりから記述される歴史は特にフランス留学で会得したテーマや技法で絵画彫刻が記されて

いる。それまで記されていた仏像、茶碗、掛け軸、屏風などは姿を消す。ただ柳宗悦の民藝運動で「発見された焼き物」は絵画彫刻の流れの中に記されている。言われていることだが、日本にはヨーロッパのように美術はなく工芸というものがあつたとされる。本来、美術と工芸は相反するものだと私は考えているが、唯一民藝運動は工芸を自己言及的にとらえていくことで、近代芸術の意識と重なったと考える。柳宗悦の民藝運動はヨーロッパ美術の日本への導入に対する批判から生まれていることが興味深い。

工芸的素材へのまなざし

蚕繭、真珠、また過去に使用の豚真皮などは美術の素材の物語にはない。むしろ工芸の素材として現代でもある。染色家など蚕繭から糸を取りそれを織上げ、着色し素材から自身の手で作り上げそして作品としている。真珠などは装飾具として使用され工芸、デザインの範疇に置かれている。初めから素材に貴重な価値があり身に着けるといふ実用性が物語として定着している素材、それを美術という価値の変容の歴史の中に入れることは、鑑賞者に理解されることは難しいことのようなのである。

工芸的素材を視覚的経験の価値のみで提示することは鑑賞者にどのように映るのであろうか。現代では美術と同じように視覚経験だけで芸術的価値を作ろうとするものは多々ある。美術館でも百貨店でも鑑賞のみの展示は常態化しており、そこに陶彫やオブジェもある。実用的でなく美術のように見ることの純粋性を重視したものであることは理解できる。

見ることのフレーム

現代アートということばの範囲は広い。当然美術だけでなく工芸、デザイン、写真それ以外の領域も含んでいる。そのような多様な見方を強いられる作品を鑑賞する時やまなざす時は、フレームという理解するための枠組みが必要となる。例えば抽象画がわからない人には抽象画に対応するフレームが必要となりそのフレームを通して作品を鑑賞することそれが抽象画に近づくことが可能になる。

作品に出合うとき、人はこの作品をどのように鑑賞したらよいかをまずは自身が構築した経験知からフレームを探すだろう。それは基本作品の形態から絵画、彫刻、版画、インスタレーション、パフォーマンスなどそれと同時にその表現形態がどのようなメディウム、素材で成り立っているかも重要な要素になっている。

キャンバスに絵具での表現、大理石を削っての人型の表現、日用品の構成によるオブジェ表現など、芸術における素材の歴史が鑑賞者にとっても作品を経験できる重要な要素である。この理解するためのフレームの新たな構築が工芸的素材意義を超えることに繋がる。

※制作ノートとして一部レポートにしました。